HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	穀物女神の継承者としての聖母マリア ： 神秘の釜の図像をめぐって
Author(s)	久木田, 直江
Citation	基督教学, 30, 19-24
Issue Date	1995-07-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46556
Type	article
File Information	30_19-24.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

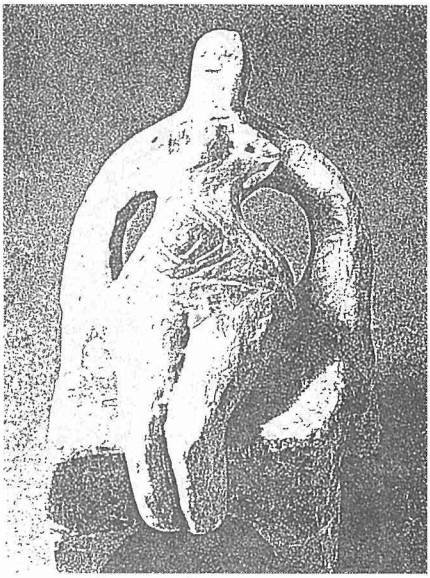
穀物女神の継承者としての聖母マリア
――神秘の釜の図像をめぐって――

久木田　直江

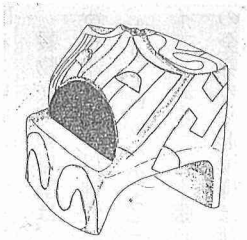
聖母マリアは、人間の宗教的体験の黎明期から崇拝されている地母神に類似し、穀物女神の多くの特徴を受け継いでいる。キリスト教布教の過程で、マリアのイメージは母神崇拝を取り込み転化させていると考えられるが、本稿では釜と聖体のシンボリズムを中心に中世におけるグレイン・マリアについて考えてみたい。

穀物女神の原型は、紀元前七―五世紀の古ヨーロッパ新石器時代の母神像に見ることができる。ギンブタスは、「古ヨーロッパのみごもった女神が穀物女神のプロトタイプである」[1]と主張しているが、写真の妊婦像（図1）の全身の菱形模様は耕地を象徴し、像の腹部と臀部には発芽と成長の源である種子を表す点が押されていた。これらの像は、釜の近くや穀物貯蔵室に置かれ、豊穣の女神が人々の生死を左右する食生活に直接影響すると信じられていたことが分る。また、パン焼釜は穀物女神の化身（図2）と考えられ、みごもった母神の腹部に似せて作られた。

母神崇拝は、前四五〇〇から二五〇〇年頃、古ヨーロッパがステップ地帯の遊牧民族の侵入をうけ、社会のしくみや宗教が母系から父系的構造に移しかえられた後も、



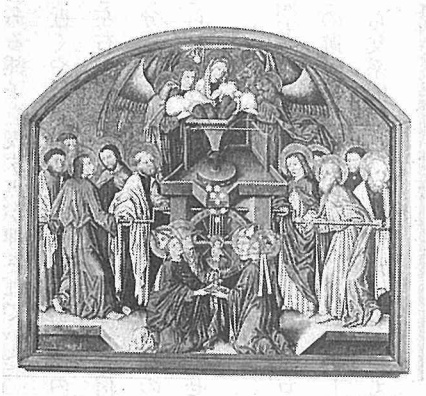
Pregnant figure,
central Bulgaria, 4500 B.C.



Miniature model of an oven with anthropomorphic features. Vinca. 5000-4500 B.C.

古代中近東、地中海世界に引き継がれ、デーメテール崇拝等に現れる。しかし、ユダヤ、キリスト教の父権制社会の中では、大地母神は異教の女神として是認されなかった。とはいえ、大地母神の生命力は民間信仰の中に生き永らえ、初期キリスト教にも融合されマリアの複雑な様相の中に息づく。中世でも、大地母神崇拝はマリア崇敬の中に生き続け、「麦穂のマリア」（図3）として知られるグレイン・マリアの中に一つの様相を呈している。マリアのガウンの麦穂は、マリアがキリストを受胎し救いの麦を成育させる「共同贖い主」（Co-Redemptrix）の象徴であり、受肉の過程で麦を変容させ、胎内で生命のパンを焼成する「聖なる器」としてのマリアを暗示している。

麦粒の宗教的象徴性についてケレーニイは、「デーメテール賛歌」の穀物は、「消滅と復活を思わせる回帰」[2]を象徴すると解釈している。また、乳母としてのデーメテールの奇妙な振舞（不老不死の身体を与えるために、赤子を火の中に入れる）も、穀物の運命を暗示している。穀物はパンとなるためいったん火によって死ぬ



Swabian retable, when opened. C. 1440

THE MADONNA OF THE SHEAVES
Woodcut, perhaps Baearian, C. 1450

が、死を克服して人間の生命の糧となる。大地なる母の胎内から生まれ、粉に挽かれ、釜で焼かれてパンになる穀物の運命は、マリアの胎内で実を結び人となるキリストを連想させる。スワビア地方の祭壇画「神秘の臼」(Mystical Mill)（図4）では、マリアが漏斗に麦を注ぎ入れ、そこから幼子キリストと聖体が現れでて信者に与えられる場面が描かれている。

さて、キリスト教のシンボルの中では、大母神の子宮はキリストが育まれる汚れない「器」を意味する。ノイマンによると、変容の秘儀は女性の原秘儀の一つであり、変容の器は母胎と同一視される。大母神の胎は「人間を作り、生み、再生させる鍋[3]」であり、マリアの胎は受肉の変容をおこす聖なる器である。「お告げ」に描かれた花瓶は図像学において、受肉の器、聖体の入る器を表す。さらに、変容は家の中心にある炉や釜の中で、火を用いることによって行われる。マリアの胎は火と結びつくことで焼釜にかわり、農耕の実りがパンに変化する秘儀と結びつく。

Moralization of Leviticus　2：4
Bible Moralisee. fol.59r of Oxford
Bodleian library MS　270 b.

中世神学者の間にも、パンをマリアの胎内の実りと解釈する伝統があるが、聖トマスは釜のイメージをマリアの胎と重ね、「パンは〈生けるパン〉であるキリストを表す。つまり、聖霊によって処女の胎内の釜で形成された完璧なパンなのである[4]」という解釈を示し、セルのペトルスも、

Robert Campin
(Master of Flémalle)
Merode Altarpiece, central panel:
Annunciation, ca1425-1428.

Robert Campin
Virgin and Child before Firescreen, 1420.

「釜は処女マリアの胎である。火は聖霊の恩寵で、パンは神の子の受肉である」[5]と言っている。同様の解釈が一三三〇年前後の説教書の挿絵（図5）とテキストに見える。これはレビ記二：四を予表論によって解釈したものであるが、上段ではパン焼釜の形をした炉付きの祭壇に、ヘブライ人がパンを入れており、下段には「お告げ」が描かれている。横の説明には、「パンを火の中に送ったユダヤ人たちは神が自らの子をマリアの胎内に送った事を予表している」[6]とある。

キリストの受肉とパンの類似は初期ネーデルランド派の絵画にも現れる。ロベルト・カンパンの「メロード祭壇画」（図6）の中央の「お告げ」の場面にも、マリアの背後に母胎と思われる炉が描かれている。また、「炉ばたの聖母子」（図7）の背景にも二本の柱がかすかに見えるが、この炉もマリアの子宮を象徴するパン焼釜である。堂々と胸を露にし、幼子キリストを抱く聖母は、キリストに糧を与える母神であり、天の糧であるキリストを信者たちに与える原始以来の大母神のように見える。

さて、キリスト教の中で、麦とパンの神学的象徴の意味は聖体の秘儀の中にある。ヘブライ人の燔祭の捧げ物はキリストの受肉、受難、そして聖体の予表と見なされるが、聖トマスは聖体をキリストの磔の再現と解釈し、レビ記一：十三の全燔祭のいけにえがキリストの犠牲によって成就したと言っている。先の説教書に描かれたパンを釜の祭壇にくべるヘブライ人の行為は、十字架のキリストを予表している。聖トマスはこれを、キリストは「この世で受ける苦難によって、焼鍋の中で再び焼かれ、

Workshop of Master of the Coronation: Ceres Paris, Bibl, nat. fr.12420. fol.12

Hours of the Rohan Master. Flight into Egypt, Grain Miracle. Bibliotheque Nationale, MS., Latin 9471, fol 99.

十字架という焼きあみの上で火に焼きつくされた[7]」と解釈している。

民間伝承の中にも、グレイン・マリアと麦に象徴されるキリストが「麦穂の奇跡」に現れる。マタイ福音書によると、「エジプトへ逃れよ」との天使の声でヨゼフと家族は旅立つ。外典等によると、途中で一行は小麦の種を蒔いている農夫と出会い、ヘロデの兵士達に種まきの頃にみかけたと答えるように頼む。マリア一行が畑を横切ると、種が瞬時に成長し熟す。ヘロデの兵士は幼子の行方を問いただすが、農夫の答を聞き追跡を思いとどまった。マリアの通る道には穀物の奇跡の成育が起き、イエスは無事にエジプトに逃れていく[8]。

「麦穂の奇跡」は中世後期のマリア崇敬の高まりと共に広くヨーロッパに流布した。ローハン　マスターの描いたマリア（図8）は、熟れた麦穂を思わせる黄金色の光を天から受けている。下方では、「麦穂の奇跡」によってイエスが「幼子殺戮」から逃れる場面が描写されている。この絵は、ローマ神話のケレスを描いた同年代の細密画（図9）にも類似し、「麦穂の奇跡」をモチーフとして穀

物女神像がマリア像に重ねられて伝承されたものと考えられる。

「麦穂の奇跡」は歌謡のモチーフにもなったが、《The Carnal and the Crane》では、「麦穂の奇跡」を知った農夫が幼子キリストを人類の救い主と崇め、一方、イエスは救いのために自らの血を捧げることを予告する。[9]「麦穂の奇跡」とキリストの血による犠牲を結びつけることで、穀物女神マリアとマリアの奇跡に助けられ、贖罪の道を歩むキリストとの関係が人類救済の歴史の中で浮き彫りになる。

穀物女神の豊穣と変容の能力を継承したマリアは、胎内でキリストを焼成し、「麦穂の奇跡」を起こし、キリストによる贖罪を可能にした「共同贖い主」と言えるだろう。マリアの複雑な特質は、苦難と死、犠牲と破壊を経て、死するものを不死なるものに変容させ、再生させる大地母神の秘儀がキリスト教と融合し変容したものである。グレイン・マリアへの崇敬は、キリストの実り豊かな死と復活を成就させる大いなる母への祈願、憧憬の一つの側面であり、中世ヨーロッパ文化の底流に流れている。

註

(1) Marija Gimbutas, *The Civilization of the Goddess*, (San Francisco: 1991), p.228.

(2) C. G. Jung and C. Kerényi, *Essays on a Science of Mythology*, (Princeton: 1949), p.117.

(3) Erich Neumann, *The Great Mother*, (Princeton: 1963), p.268.

(4) Aquinas, 1a, 2ae, Q.102, Art.3.

(5) Pierre de Celles, Liber de Panibus, caps.7,21 PL 202, cols.959, 1017-22.

(6) テキストは次の写本による。fol. 59r of Oxford, Bodleian Library MS270b.

(7) Aquinas, 1a, 2ae, Q.102, Art. 3.

(8) Pamela Berger, *The Goddess Obscured*, (Boston: 1985), p.90.

(9) Francis James Child ed. *The English and Scottish Popular Ballads*, vol.2, (New York: 1965), p.9.